

# 春先の虫たち

2020.3.14 自然解説員 神谷耀生



キタテハ



ルリタテハ

成虫<sup>せいちゅう</sup>で冬をこすチョウたち。キタテハの幼虫<sup>ようちゅう</sup>はカナムグラを、ルリタテハの幼虫はサルトリイバラを食べます。両者ともにはねのうらは枯れ葉そっくりで、冬ごししている間はまわりの風景<sup>ふうけい</sup>にとけこんで目立ちません。春が近づいてあたたかい日が増<sup>ふ</sup>えると、日なたを飛び回るようになります。



キバラモクメキリガ

成虫で冬をこすガ。木のえだのかけらにととてもよく似ています。樹液<sup>じゅえき</sup>や花のみつ、灯<sup>あか</sup>りなどにやってきます。他のガとちがって、敵<sup>てき</sup>に見つかると飛んで逃げようとせず、じっとかたまってやり過ごそうとすることがあります。



クビキリギス

成虫で冬をこすキリギリス。冬ごししている間、体の色を茶色く変えることがあります。あごの力が強いがおとなしい性格で、主に植物の葉っぱなどをエサにしています。春になると草むらや生垣(いけがき)の中で「ジーーッ」と切れかけた電球でんきゅうのような音で鳴きます。耳にしたことがあるかもしれませんね。



カブトムシの幼虫

夏の終わりに産み落とされた卵からかえった幼虫は、腐葉土(ふようど)の中ですくすくと育ち、冬には2回目の脱皮だっぴを終えて大きな終齢幼虫(しゅうれいようちゅう)になっています。このころの幼虫は成虫よりも体が重くなります。5月～6月ごろになるとさなぎになり、夏の森で活動する時を待つのです。

作成：2021年3月 21世紀の森と広場 パークセンター